

ミスが命を救う - 私の戦争体験記

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA 顧問 教育アドバイザー
張江 幸男

今回の原稿は、このコラムの主題から外れていますが、私の戦争体験を書かせていただきます。
敗戦のとき、個人と国家戦略の狭間にあえいだ体験を、若い人に分かってもらいたかったのです。

【1】終戦の日を思い出す葉月かな

1945年8月15日、日本政府はポツダム宣言を受諾し、降伏文書への調印を連合国へ通達、翌日には各軍への停戦命令の布告を及び武装解除を行った。これに対応しイギリス軍やアメリカ軍は、即座に戦争行為を停止したが、8月9日に対日参戦したソ連軍は、これを無視して当時の日本の領土であった樺太に侵攻した。

終戦の年、私は中学2年生だった。樺太（サハリン）の庁所在地豊原（ユジノサハリンスク）で終戦の放送を聞いた。樺太庁長官大津敏男は、ソ連軍の攻撃から避難させるため、長官命令で、婦女子や老人を優先的に本土に送還させようとした。

【2】婦女子とは

このときの命令では、婦女子とはすべての女性と、14歳以下の男子を指していた。わたしはその上限の14歳だった。ところが、引き揚げに必要な書類には、私の年齢は15歳と誤記されていた。あわてた両親は市役所で、年齢の誤記を訂正してくれと交渉したが、大混乱に陥っている市役所では取り上げてくれない。両親は毎日通ったが埒があかない。その時、私は嬉しいことに気がついた。クラスメイトに市長さんの息子がいたことを。その夜、両親と一緒に市長さんの官舎を訪ねた。もちろん、分かってくれたし、ミスにも陳謝された。翌朝、市役所で一番に14歳の証明書を交付してくれた。

【3】その船は・・・出港していた

父が通信局（今の郵政局）に勤めていた関係で、我が家族が乗船するように命令されたのは、小笠原丸だった。この船は通信省の海底ケーブルの敷設艦だったが、この事態になったので引揚船として転用されることになったのだ。豊原から大泊港までは、汽車で運ばれたが客車だけでは足りないの、貨物列車も使われた。私たちが乗ったのは無蓋の貨物列車だった。普段は石炭を運んでいたらしく、床に石炭の小さな欠片が散らばっていて、お尻にちくちく刺さるように痛かったことを覚えている。

夜が明けたころ、漸く港に着いた。何だろうこの光景は。駅から港の岸壁まで、数十万の人間が群れている。しかも、私たちの指定された小笠原丸は煙を吐きながら出ていくではないか。天を仰いだ。この群衆の中で、いつになったら岸壁に着けるのか。不安がつつた。自分のせいで遅れたことを母に詫びた。母は笑いながら神様が何とか助けてくれるよと元気に言った。このとき、8月20日午前5時。

【4】笑いながら撃ってくる

母の取り出したおにぎりにかぶりついた。母は4人の子供に、日本の船がたくさん来るから大丈夫だよ、と弟や妹を励ましていた。

その時、すさまじい轟音が近づいてきた。群衆はいぶかしげに見上げた。ミグ戦闘機の編隊だった。グワーンという音が近くなり、飛行兵の顔も見えるほどの低空飛行だった。色白の顔に頬が赤い飛行兵だった。それがどうしたことだろう、群衆に向かって機関砲で撃ってきたのだ。ガンガンというように、まるでトタンを巨大なハンマーで叩いて過ぎ去ったようだった。すぐに悲鳴が上がった。まるで遊びのように攻撃していったのだ。降伏し、武器も持たない婦女子の集団に死者の列を作っていたのだ。

樺太の西海岸に、ソ連軍が上陸してきたとは聞いていたが、まだ一度も空襲も砲撃も体験していなかったので、これが戦争なのだと、此の時気付かされた。だから、此の後からが大変だった。ズングリしたミグ戦闘機の機影が見えると、群衆は倉庫の影や貨車の下に逃げ込んだ。この民衆が偉かったのは、爆音が去っていくと元の場所に皆が整然と並んだことだ。

【5】ラッキー、駆逐艦

埠頭の岸壁に、大きな引揚船が着くとウオッという大歓声があがる。行列が少しずつ前に進む。しかし、大きな船の着く岸壁の先端までは、随分人がいる。カンカン照らされている太陽が恨めしくなる。一夜が明けた、列は大分進んだ。翌日の朝、埠頭手前の横の岸壁まで列は進んだ。